

余録

ぬさまい  
幣舞橋

— 国道二八号 —

春の夜霧にかすむ幻想的なたたずまい、夏雲に映える姿、  
橋の上からみる落日の美しさ、これが「幣舞橋」である。

橋詰めのおベリスク風の親柱、

ハマナスの花を抽象化したデザインの高欄、

橋上のブロンズ製の彫像、この橋は釧路の風土を

如実に表している「橋」である。

そして豊かな詩情が漂う橋として歌にうたわれ、  
文学にも数多く登場している。



釧路くしゅう 幣舞橋ぬまいばし 齋新岳作

五度架橋ごたたびかきょうし 経百年ひゃくねんをへり 先賢苦節せんげんのくせつ 泛清漣せうれんたうなな

彩霞煙霧さいかえんむ 情無極なさけなきまわりなし 彫像四姬ちやうざうのよんひめ 相映鮮あひえいしやまかひ

この詩の大意は「初代の木製橋が架けられた明治二三年から、架け替えの現幣舞橋は五代目で、昭和五一年完成、初代から百年を経たのである。機械力に乏しい当時は、結氷や増水などで苦勞した姿が漣に残る如く、その思いは尽きない。夕焼けや霧に包まれた幣舞橋は、北海道の三大名橋として親しまれ、市の動脈としても重要である。四季を象徴する乙女の像は、わが国では珍しい橋上彫刻で、日本を代表する彫刻家四人の傑作であり、霧の街のシンボルとして、四つの裸像は互いに調和しその姿は誠に鮮やかである」(『北海道の漢詩』)。

霧の幣舞橋というのは、釧路川に架けられている橋で、地元釧路はもとより、広く観光客にも親しまれている。新しい橋は昭和五一年一月二六日に五代目幣舞橋として生まれ変わり、現代風の中に、古い伝統美を盛り込んで誕生した。橋長一二四・〇mの三径間連続鋼床版箱桁で、現代の橋梁技術の粋を集めた橋である。

桁の側面形状は、放物線を採用した旧橋の持つ重厚な落ち着きと、ヨーロッパスタイルのイメージを温存することを考え、全体的にスレンダーな感じとしたものであった。

昭和五二年五月三日、道東の風土を高らかにうたいあげた釧路の新しいシンボル「道東の四季」のブロンズ像の除幕式が行われた。当初は「裸像が故に物議を醸した」

ものであった。

この日釧路は前夜から朝方にかけて雪が降った。五段雷の花火を合図に除幕式が行われた。

そして四体の像にそれぞれ製作者が立会い、消防本

部音楽隊のファンファーレが流れる中、春・夏・秋・冬

の順で次々と像を覆っていた幕が下ろされた。名橋の誉れ高

き「幣舞橋」に、さらに、芸術的な価値が付加されたものであった。

この橋の建設に携わった倉橋元北海道開発局長は「一つの橋が住民の方々にこれほど深い愛情が注がれた例があつたでしょうか。私どもは新橋の架替えにあたりましては、歴史的、風土的な背景を思いをいたし、以前にもまして立派な橋にすることを念頭に置きました。このため旧橋の風格とイメージを残し、かつ、新しい美しさを求めて国の事業としての範囲で最大限の努力をいたしました。さらに、住民の方々の橋に注がれた愛情がここに橋上の彫像の完成となって実を結びました」と、祝辞を述べている。わが国で初めて橋上に彫像が飾られた橋の誕生であった。

西洋では古代から住民の心をやすために、橋の上に彫刻を載せる都市造りが行われてきた。わが国ではこのような思想が根付いていなかった。しかし今、ここに実現したのであった。この幣舞橋のように、公共の橋でありながら提案から資金まで、市民運動だけによって、芸術性の高い彫像が取り付けられた橋は、わが国でも初めてのものであった。それだけに市民にとって自慢の橋となっているものであり、北国に生



芸術的な価値を付加した「四季の像」  
—釧路市観光パンフより—

きる凜とした強さを秘めた橋である。設置の事業費は総額四、五〇〇万円であつて、全てが市民の浄財で賄われたものであつた。

この釧路のシンボル幣舞橋は、高さ六・八mの親柱を持ち、道内では珍しい風格と、釧路港を間近に、夏は朝霧、夜霧にぬれ秋・冬は夕日に映える姿が、この釧路を訪れる人たちにロマンチズムをかきたたせてきた。そしてさらに、道東の四季をテーマにし、一流彫刻家が製作した四基のブロンズ像がこれを飾っている。

新しい幣舞橋を祝う

おお橋よ 朝の光に輝く橋よ

澄みわたる空 遙かに阿寒の山脈

港には大漁に旗ひるがえり

潮風香る 新しい世紀に生きる幣舞橋

喜び祝う声を 未来にかける橋

これぞわがふるさとの橋



霧の街・釧路のシンボル「四季の像」

(歌詞の一部) 作詞 柏村静子 作曲 星 壽夫

地元釧路市民はもとより、道内外の観光客にも親しまれている「新幣舞橋」が誕生した。

この日、早朝から雪模様となり、新しい橋も雪化粧となった。橋の両端には「祝五代目幣舞橋完成」の横断幕が張られ、午前10時ころから約三、〇〇〇人の市民がこの橋の袖に集まってきた。

午前11時から竣工祝賀会発起人会主催による修祓式が行われた。神主の祝詞の後、関係者が玉串を神前に捧げ、倉橋北海道開発局長・山口釧路市長ら七人の手によってテーパーカットがされた。

消防音楽隊二二人が奏でるファンファーレによって約四〇〇羽の鳩が冬空に舞い上がった。続いて渡橋式が行われ、そして渡り初めの儀式となった。新海龍勇一家ら三代の夫婦五組と、一般参加者約五〇〇人が喜びの渡り初めをした。

続いて地元ウタリ協会釧路支部と釧路アイヌリムセ保存会の一五人により、男性は民族衣装に弓と刀を持ちお払いしながら進む。後列の女性たちは老婆たちの姿を再現し、杖をついてコンニカニルイカ（金の橋）、ホウルイカ（渡る）、ノシロカニルイカ（銀の橋）ホウルイカの歌詞に合わせて、古式にのっとりたアイヌの民族舞踊による渡り初めの儀式があり、盛大に五代目のスタートを祝った。



第五代目「幣舞橋」の誕生 ー提供：釧路開発建設部ー

地元の青年たちは揃いの半纏で木遣を歌いながら渡って、ムードを盛り上げていた。その後は一般市民をはじめ、近隣町村からも参加した郷土芸能によって完成が祝われた。

また、商工会館では祝賀会が開催され、この日鉦路は一日中「幣舞橋」一色に彩られた。第五代目「幣舞橋」は、かくして「鉦路の繁栄にふさわしい橋」として、昭和五一年一月二六日に誕生となった。

そして、この「合唱曲・新しい幣舞橋を祝う」の曲が市民会館で、江南・星園・北陽・湖陵の四高校合同合唱により、新橋の誕生を声高らかに歌い上げられたのである。

### 鉦路の夜

霧は降る降る今日もまた

一人歩きのヌサマイ橋よ

船の汽笛も泣いている

女心も知らないで

貴方がにくい 貴方がにくい

作詞・作曲 宇佐英雄 歌 美川憲一

鉦路市北大通一丁目幣舞橋交番の後ろに、ぬさまい河畔公園がある。ここにこの四つ像「道東四季の像」の建立由来を伝える碑が植え込みの中にある。

この広場の中ほどに総高二一〇cmの黒御影石の台座に、艶消しされたステンレス製の「波」をイメージして三角形となった主柱の「鉦路の夜」碑がある。

この碑の前に立つと、内部に組み込まれているセンサーによって、美川憲一の大ヒット曲「鉦路の夜」が流れてくる。昭和四二年に鉦路出身である宇佐英雄の作詞・作曲によるものである。

美川は「柳ヶ瀬ブルース」で有名であったが、それ以来しばらくヒット曲がなかった。その後この霧と幣舞橋と鉦路川を歌ったこの曲で大ヒットを飛ばした。そして昭和四八年の紅白歌合戦に初出場した。このことで彼は鉦路を恩人とも思っていたのであった。

平成五年一月の鉦路沖地震で、鉦路市は大きな被害を被った。このことに心を痛めていた美川は、全国でチャリティーコンサートを開き、集まった募金三〇〇万円と、それに自分の見舞金一〇〇万円を加えて、鉦路でのコンサート会場で市長に手渡した。そして平成五年九月に、美川憲一の寄付、それに一般及び商店の寄付、市の助成などにより六五〇万円の費用で、この「碑」が建立されたものであった。

鉦路のシンボルといえば「霧・幣舞橋・鉦路川」である。その中で「幣舞橋」はこの美川の歌によって全国に広く知れ渡ったのであった。

この「鉦路の夜」の外にも「涙いろした 夜霧の街に咲いているだろ 榆の花 忘れましょか ヌサマイ橋で 好きで 好きで 別れた あゝ あの人を」という「霧のヌサマイ橋」というのもあり、この外にも「鉦路の街に霧が降る」「女ごころの鉦路川」「鉦路みれん」「夜霧の鉦路」「ヌサマイ橋」と、この幣舞橋を詠んだ歌謡曲は

多い。

一つの橋でこれほど多くの歌謡曲があるのも珍しいとされる。

都鳥水面かすめて飛びかよふ

夕日さやけきぬさまいの橋

幣舞の橋のほとりに夕げはむ

窓近く飛ぶ都鳥かな

幣舞橋ふたての街を接ぐところ

渾濁こんだくの海水へまかなふ

幣舞の橋を見たさに夜の街

行けば濃霧が海よりこむる

磯の香の漂ふあしたの釧路川

しばし憩はむ幣舞橋に

杳き日の恋みのらせし橋替わり

裸婦像濡れ立つ子ら果立ちいま

湯川秀樹

同

中山 勝

橋本裕子

宮崎純子

工藤ミサ

これら幣舞橋を詠じた俳句・短歌の数は数えきれない位、多く残されている。橋梁の歴史に詳しい佐々木光朗の調査では、橋とその橋上の彫像等を含めて俳句が二九六首、短歌が一九六首の多くに上っている。うち本橋のものが一五一首、彫像が三四一首である。

文学にも数多く登場する。古くは明治四一年（一九〇八）に釧路新聞に招かれた二歳の石川啄木は、二重マントにかすりの着物姿で初代の幣舞橋を渡った。そして「傾きかけしあやふさに 柱ゆがみて欄よれて 行き來の人等かく思う 老いて醜く横たわる 三月とぎせる川氷 悲しきさだめ自ずから とけばやがてかの橋の 渡れば嘆きしきしと 崩れ落つべき時來んと 彼の幅狭き長き橋」と詠む。やがて九年の務めを終えて、明治四二年に二代目幣舞橋となる。

徳富蘆花の「み、ずのたわごと」に「夕汐白く漫々たる釧路川に架した長い長い幣舞橋を渡り輪島屋と云う宿に往つた……幣舞橋には蟻のやうに人が渡っている……予はなんとなくブタペストに遊びたる往時を想起した。ガスやもやのためになんとなく鈍色の雰囲氣は免れぬがその風光には佳趣がある」と、明治四三年（一九一〇）九月に來釧した時のことを書いている。明治から大正にかけて紀行文を書いている河合裸石の「蝦夷地は歌ふ」や、早川三代治の「処女地」にも書かれているが、原田康子の「挽歌」が何といつても有名であろう。昭和三年にベストセラーとなり二度も映画化された、一躍釧路・幣舞橋の名が高まった。武田泰淳の「森と湖のまつり」や渡辺喜恵子の「原生林」、金沢恒司の「おんあぼきや」などにも登



オベリスク風の荘重な飾り塔「親柱」

場している。

なお、初めて架けられた橋は明治三二年（一八八九）に、民間の手による有料橋「愛北橋」として誕生した。初代幣舞橋が明治三十三年に、二代目が同四二年に、三代目が大正四年（一九一五）に、そして北海道の三大名橋の一つといわれた先代の四代目は昭和三年（一九二八）に架けられたものである。したがって現在の幣舞橋は実質的には六代目であるが、幣舞橋としては五代目となるものである。

釧路のシンボルである「幣舞橋」は、今日も霧に映えた橋として、その姿を釧路川に映している。

#### 引用および参考文献

- 尾角鳳師編「北海道の漢詩」藻山吟社、平成四年  
「新釧路市史」釧路市、昭和四九年  
三浦 宏「霧の幣舞橋」道路、一九八一年  
松村 博著「日本百名橋」鹿島出版会、一九八八年  
釧路幣舞橋彫像設置市民の会編「幣舞橋と道東の四季像」、昭和五三年  
「釧路新書・釧路碑文手帳」釧路市、平成一〇年  
三浦 宏編著「語り継ぐ北海道の橋百話（四）道東編」未発表